

キリスト教
文学の世界
16

トルストイ
チェーホフ
レスコフ





キリスト教文学の世界

16

トルストイ

ЛЕВ НИКОЛАЕВИЧ ТОЛСТОЙ

レスコフ

НИКОЛАЙ СЕМЕНОВИЧ ЛЕСКОВ

チェーホフ

АНТОН ПАВЛОВИЧ ЧЕХОВ

主婦の友社

〈筆・訳者紹介〉

- 山本七平 1921年生まれ。評論家。
原久一 1971年没。ロシア文学者。
原卓也 1931年生まれ。東京外国語大学教授。
武田友寿 1931年生まれ。文芸評論家。
工藤精一郎 1922年生まれ。関西大学教授。
森内俊雄 1936年生まれ。作家。
龜山郁夫 1949年生まれ。天理大学ロシア学科講師。

キリスト教文学の世界 16

トルストイ レスコフ

チェーホフ

昭和五十三年七月二十五日 第一刷発行

定価一八〇〇円

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―六

郵便番号 一〇一

振替 東京二―一八〇番

電話 東京(〇三)二九四―二二二(大代表)

印刷所／大日本印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえます。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

目次

トルストイ

〈解説〉

啓蒙主義と人間の生き方

山本七平 5

閑人たちの会話

原久一郎訳 17

光あるうち光の中を歩め

原久一郎訳 22

イワン・イリーチの死

原卓也訳 72

神父セールギイ

原卓也訳 118

人と作品……………原卓也

350

レスコフ

〈解説〉

古典的な“救魂”の文学

武田友寿 157

魅せられた旅人

工藤精一郎訳

168

人と作品

……工藤精一郎

353

チエーホフ

〈解説〉

チエーホフの慰め

森内俊雄

289

短編

亀山郁夫訳

300

復活祭週間／大学生／殺人／僧正

人と作品

……亀山郁夫

356

トルストイ

〈解説〉

啓蒙主義と人間の生き方

山本七平

『イワン・イリーチの死』『神父セールギイ』『光あるうち光の中を歩め』の三編は、共通した主題をもっている。それは一言でいえば「人が生きる、とは一体どういうことなのか」であり、その意味では「真生探究の書」といえる。そしてこの中で、現代の日本人に、その問題が、身近な切実な自己の問題として捉えやすいのは『イワン・イリーチの死』なので、まずこの一編で、トルストイの主題を探究してみよう。

「イワン・イリーチの過去の生活史はきわめて単純、平凡で、しかももっとも恐ろしいものであった」これは、彼の死の直後の、未亡人や友人の動きの描写の後にはじまる、彼の生活史の簡単な要約である。しかし、たとえイワン・イリーチが、現代の日本の隣りに住む実在の人物であつても、その精神の内側を見なかつたら、「単純・平凡」は当然としても、なぜ「もっとも恐ろしいもの」であつたのかは、だれにも理解できまい。彼は四十五歳で死んだ一判事、もし人

が彼の遺体に向って何か「くやみの言葉」をのべるなら「早死で気の毒だったなあ」と言えるだけ、それ以外の点では別に何も言うこともない、平凡かつ順調な生涯だったはずである。

彼は官吏の次男で「賢い、生き生きした、気持のいい、礼儀正しい人間」で、法律学校（いまなら大学の法科か）に学び、在学中すでに「有能な上に快活で、人がよく、人づきあいもよかったが、自分の義務と考えたことは嚴格に実行する」人間であった。官界に入ってからのは、少しも変らずこの態度を維持して周囲の人びとの信頼を得、職務にも有能で「一八六四年の法令の適用を实地につくり上げた最初の人々のひとり」であり、さらに、自分の権力を悪用せず、また「要求されるすべての形式を守って行くような方式を、自家菜籠中のもの」にしていった。一言でいえば、有能で、そつがなく、生ませぬだが人づきあいのよい官吏だったわけである。そしてこういった態度は結婚にも現われ、彼は確かにその花嫁を愛したが、同時にその結婚が社会的通念から見て、すべての人びとによって「この配偶をよし」とされることもその愛の一部であり、彼は「両方の考慮によって結婚した」わけである。考えてみれば、否、特に考えてみなくても、この生き方はいまの日本の多くの人びとの生き方であり、この生き方に少しも疑問を感じていない人も少なくない。

もちろん彼の人生にもいろいろなことがあった。夫婦の間に争いがあった、彼がその身上とする「ほんのかるい、上品な生活態度」の維持がむずかしくなったり、栄転に失敗して失意の底にあり、同時に生活費が収入を上まわったため借金に苦しめられたりしたが、彼はその状態から脱却すべく積極的に努力し、ペテルブルクへ猟官運動に出かけ、人びとの予期以上の成功を得た。その結果、夫婦の和合も成り立ち、親戚もまた周囲の人も「にわかには愛想よく、親類顔をするようになり」そこで彼は喜び勇んで任地へ出発した。「勤務上の成功と妻との和合に

よってかもされた心楽しい気分を、ひとつひとつ強化しながら」、夫妻が「かねて空想していた理想そのもの」ともいうべき新住居、いわばマイホームを手に入れて、これの整備にかかったわけである。その際は彼は脇腹を軽く打つ。そして何でもないと考えたこの事故が実は「死に到る病」となった。それが一つの不幸であったというなら、問題はただそれだけである。しかしトルストイは彼の生活史そのものを「もっとも恐ろしいもの」と規定している。ということは、たとえ彼が天寿を全うしたとしてもやはり「もっとも恐ろしいもの」だったはずであり、この事故は偶然にそれを露呈したにすぎないと言える。

なぜであろうか。生涯を平穩無事に過し、中以上の生活を維持し、すべての人と楽しくつきあい、勤務においては粗漏のない生活——普通の基準でみれば、恵まれた順調な一生と見るべきその生涯がなぜ、「もっとも恐ろしい生活」なのか。だが、それに進む前に、その逆とも見える『神父セールギイ』へと進もう。

普通の常識から言えば、神父セールギイの生涯こそ「もっとも恐ろしい生活」であり、見方によっては生活の破綻者であり、落魄の生涯をおくった異常者である。人生の出発点においては、彼は「イワン・イリーチ」よりはるかに恵まれていた。家柄は公爵であり、「華々しい才能と、巨大な自尊心」をもち、幼年学校に入ると「学課に於いても、練兵に於いても、馬術に於いても第一人者」であり、「背が人並はずれて高かったにも拘らず、美しい、敏捷な少年」であり、「酒も飲まなければ、放埒な行いもなく、著しく誠実な性質」で、唯一の欠点といえば短気なことであった。さらに彼は無欲であり、遺産の半ばは妹に与えたので、任官以後も、手許にあるのは「贅沢な連隊ではただ自分を支えて行くに足るだけ」であった。さらに皇帝ニ

コライは幼年学校時代から彼に目をかけ、やがて彼が、皇帝づき副官になるであろうことは、だれの目にも明らかであった。

以上のような彼の生き方、「イワン・イリーチ」とは方向が違うが、ある意味では同じように「模範」とも言える彼の生き方の背後にあったものは何であるるか——「彼の内部では複雑な、緊張した精神活動が行われていた。この活動は、彼のずっと少年時代から行われていたもので、見た目には極めてさまざまのものであったが、本質的にはすべて、自分の前に現れる凡ゆる事件に於いて、世人の賞讃と驚嘆とを勝ち得るだけの完成と成功を収めようとする一事の中に成り立つ同一のものであった」と。

勤務上でも、知識・教養の獲得でも、舞踏の名手でも、社会的地位でも、すべてにおいて第一人者となるのが目的で、必要に応じて目標を変えたとはいえ、この動機は同じであった。その彼が結婚の相手として選んだ女性は、当然に、そのすべてにおいて、彼の「目標」たるにふさわしい位置と状態を完備している女性であった。そしてその目的が達せられる直前に、彼は、その身分の高い純潔そのものの絶世の美女が、彼が心から敬愛してやまぬ皇帝ニコライの寵姫であったことを知る。彼は一切をすてて、修道院に入り、僧侶となった。周囲の人びとはその極端な生き方を思いとどまらせようとした。しかし妹だけはその動機が「彼に向って、自分たちが彼の上位に立つものであることを示そうとした人々の上に立つ」ことであったことを理解した。彼は、世俗の世界のすべてを軽侮し「以前には羨しく思った人々を上から見下すことのできるような、新しい高みに上った」わけである。もちろん動機はこれだけでなく、「天使と信じた許婚への幻滅と屈辱感と、それより起った絶望感が、彼を、神への信仰へ、子供らしい信仰へと追いやったわけである」。

そして僧院に於ての彼は、かつて外部的な完成を求めたと同じように、内部的な完成に到達しようとし、この努力に最大の喜びを見出した——常に、勤勉、克己、謙抑、温和、清純、従順、労働、祈禱の中に。そして三年目に「神父セールギイ」となり、その僧院で七年をおくった。しかしそのころには、なしとげるべきことはすべてなし終り、睡ったような倦怠を感じはじめていた。同時に僧院内にもある世俗との交渉と栄達は、彼に、かつての許婚への怒りと似たものを爆発させた。そして彼は僧院を離れ隠者の庵室へと去る。そこでの模範ともいえる隠者の生活、しかしそれは誘惑をもそこへ呼びよせた。さまざま願ひごとから、あるいは単なる好奇心から、あらゆる人間が彼のものとへと集まって来た。彼はついに誘惑に負ける。自己の目ざした完璧さが一瞬にして消しとんだ彼は、僧院を逃れ出る。放浪の途中で彼は、不幸な生活を送っている幼友達をたずねる。彼女はただただ、家族をやしなうために生きている。そこで彼は知る。「わしは神のためだと言いながら、人間のために生きていたのだ。ところがあの女は、人間のために生きていると思いがら、その実、神のために生きているのだ」と。やがて彼は浮浪者としてシベリヤに送られ、ある豪農の開墾地で、主人の菜園で働いたり、子供を教えたり、病人の世話をしたりして生きる。

「神父セールギイ」の生涯は、「イワン・イリーチ」の逆で、その内面を知らずにただ彼の生涯の経歴をたどれば、それはだれの目にも失敗の生涯であり、この「生活史」こそ、「もつとも恐しいもの」ではないであろうか。二人を並べてみれば、だれでもそう思うに違いない。しかしトルストイは晩年のセールギイの中に「救い」を見、その生涯を「恐しいもの」とはせず、逆に一見平穩のうちに死に至るイリーチの状態を恐しいものとし、そしてその恐しさは、単にその時期だけのことではないとしている。

なぜであろうか。これらに総合的に答えているのが、以上の二つを、併行する二人の親友の生涯に仮託した作品『光あるうち光の中を歩め』であろう。前の二作が材を同時代のロシアに求めているなら、この作品は「原始キリスト教時代の物語」という副題のようにそれを初代キリスト教時代に求め、ユリウスとパンフィリウスという仲のよい二青年の物語になっている。そのためか主題が題材に拘束されず、すべての叙述が、彼の思想をのびのびと語る素材になっており、それだけに、われわれにとっては現実味と切実感が前二者ほど濃厚ではないが、しかし彼の考え方は鮮明に浮び出ているといえる。ユリウスは富裕な宝石商の子、パンフィリウスは解放奴隷の子だが、お互に信頼している無二の親友であった。ユリウスはやがて父のあとをつぎ、「イワン・イリーチ」のような、またある点では若き日の「神父セールギイ」のような生活へと踏み出していく。一方パンフィリウスの方は、初代キリスト教徒の共同生活の中に入って行く。その生活は、いわばセールギイ神父が放浪の末やっとなシベリヤで獲得したような生活として描かれ、その中でパンフィリウスは、文字通りに平和な日々を過していく。一方ユリウスは、当時の富裕な青年らしい日々を送った後、父の仕事をうけつぎ、さまざまな人生体験もした。そして時々パンフィリウスに会い、会うたびに、自分の生活が、否、そのように「生きていく」こと自体が、一体、「生」といえる状態なのか否かを、自らに問わないではいられなかった。彼は何度かすべてを棄ててパンフィリウスのもとへ赴こうとしたが、そのたびに彼は「社会的通念」やら「世の常識」とやらに、またそれを象徴する人びとの説得に、押しとどめられた。そしてもし彼がそのまま生涯を終ったならば、その最後は「イワン・イリーチの死」と同じようになってであろう。

ではここでイワン・イリーチにもどり、その死について考えてみよう。彼の死は、一体どんな状態だったのであろう。

「イワン・イリーチの死」——死の床にある彼に、すべての人が、あたりさわりなく接触する。それはかつて彼自身がすべての人に接触した態度である。いわば「人づきあいがよく、礼儀正しく、気持よく、賢く」そしてみな「自分の義務と考えたことは厳格に実行する」。そしてそれが今や彼を無限に苦しめているのだった。なぜ苦しめるのか。それは「虚偽であった——なぜか一同に承認されている、彼はただ病気なのであつて決して死にかかつているのではないという虚偽」「一同も知り彼も知っていることを認めようとしないうで、彼の恐しい状態についてまで彼に嘘をつこうとし、あまつさえ彼自身をもしいてこの虚偽に参加させようとしている事実」「虚偽、虚偽、彼の死の前夜に、彼に対して行なわれているこの虚偽、彼の死というこの悲しい、荘嚴な事実を、すべての彼らの訪問や、カーテンや、食卓に出る蝶鮫と同じレヴェルにまでひきおろさないではおかぬ虚偽」、この虚偽に対して、彼は、大声をあげてそれをやめてくれと叫び出す一歩手前まで行きながら、それができなかった。なぜか。それは彼が、自己の生涯の規範として、一生をそれに捧げてきた生き方で、人びとが彼に接していたかたちに外ならない。彼が真実の叫びをあげれば、それは「周囲の一同によって、偶然的に不愉快事、ないしは、彼が一生それにささげてきた『礼儀』そのものによって、幾分は不作法なことにひきさげられ」「だれひとりとして彼の状態を理解しようとしないうで」ことが明らかだつたからである。

なるほど彼は死の床にいる。しかしすべての人は、生れると同時に死の床にいる。それは単に時間の長短に過ぎない。ということは、イワン・イリーチ自身が、生涯、虚偽をもって人に

接してきて、それに対して虚偽の応答をせず、真実の叫びをあげる者を、不法なものとして無視し、同じような虚偽の応対を求めてきたのではなかったのか。結局彼はいま、死の床で同じ応対をうけているにすぎず、ただそれに対して、彼もまた虚偽の応対でそれに答えることができなくなっているにすぎない。なぜか。迫った死の意識が否応なく彼に真実の生を意識させるからである。だがこの関係は結局、健康な時でも同じだったのだ。しかし彼は健康なときは虚偽の応対をごく当然のこととし、そうされることに満足を感じ、そうでなければ「不法なこと」に引き下げていたのではなかったのか。そして神父セールギイが耐えられなかったのはそれではなかったのか。それゆえに彼は、きわめて「不法」に虚偽の応対という関係を絶ち切って、真実の応対の中に生きることと求めて放浪したのではなかったのか。そう考えてみる時、イワン・イリーチの生涯は「きわめて恐ろしいもの」であり、その恐ろしさが最後に集約されて表われたことが理解できる。そしてこのことの恐ろしさは、それが「恐ろしい」ことだと人びとが感じず、その人自身すら今まで感じていなかったことの中にあつた。

本当に感じていないのか、またいかなかったのか？ 否、必ずしも感じていないわけではない。『光あるうち光の中を歩め』のブローグ、「閑人たちの会話」は、そのことを示している。ある青年は「なぜわれわれはそんな生活をするのでしょうか？ なぜわれわれはこんなふうに関の一生や、神から与えられたいっさいの幸福を台なしにするのでしょうか」と叫ぶ。だがその叫びはたちまち、「人生に熟達した」人びとの忠告で消されてしまう。そして、パンフィリウスのもとへ行こうとしたユリウスも、何回か、人生に熟達した人の忠告で、またもとへ戻ってしまったわけである。それでいて人びとは、その生活が虚偽であることを知っており、イワン・イリーチのような境遇に陥れば、それをはっきりと目の前につきつけられることも知っ

ている。さらにその土壇場でさえ、今までの生活を守ろうとしている限り、その虚偽から逃れられないことも知っている。

なぜであろうか。その理由を最も明確に示しているのが『神父セールギイ』であろう。彼のようにその虚偽の応対に耐えられず、「不作法」にこれを遮断した者さえ、神に仕えているつもりでいながら、他を意識するという形で人を相手とする状態から脱却できなかったことを悟るのである。そして彼はこれを貧しい落魄した幼友達との問答の中で知った。彼女はただただ家族の生活のために働き、貧しく、時間もなく、教会へ行くこともまれである。神父セールギイはたずねる。「では、家でお祈りなさるかね」「それはいたしません。が、それも機械的なお祈りでございましてね。これではいけないことを知っていますが、どうも本当の感情ではございませんのですよ。ただ自分の醜さを知っているというだけで……」。その言葉に彼は悟る。

彼女と別れてから彼は考える。「つまり、これがわしの夢だったわけだ。……あれこそわしが必要なければならぬものだった。それをわしはならなかったのだ。わしは神の為だと言いながら、人間の為に生きていたのだ。ところが、あの女は自分では人間の為に生きていると思いがら、その実、神の為に生きているのだ。……そうだ、一つの善行、報いを予想しないで与えられる一ぱいの水、これこそわしの手で人々の為に施された恩恵よりも遙かに貴重なものなのだ。しかし、そこにも神に仕えようという真面目な願いの一滴ぐらいはなかっただろうか？ ……あるにはあった。が、それはみな浮世の名聞によって殻をかぶせられ、汚されてしまったのだ。そうだ、わしのように浮世の名聞の為に生きていたものにとっては神はないのだ。これからわしは神を捜そう……」彼のこの言葉は、彼が修道院に入ったときの動機を知っていた彼の妹にはすぐに理解できたであろう。

真に生きること、それは虚偽の応対を離れて神を捜すことだ。神を捜すとは、人に仕えてくれるように見えて実は神に仕えていることであり、神に仕えているように見えて実は人に仕えて神を失っていることではない。

ではこれらの主題は、現在のわれわれにとって、どのような意味をもつのであろうか。これら作品が書かれたのはすでに一世紀の昔であり、この内の一編は、二千年近い昔の物語である。では、この作品はすでに、こういう作品もあつたのだという人間の思想の一つの里程標、または玩味すべき古典にすぎないのであろうか。そう思われた時代もあつたであらうし、また、イワン・イリーチと全く同じような生活をしながら、そう思い込んでいる人もいるかもしれない。否、イワン・イリーチ自身が、平穩無事な時期にこの作品を読めば、同じように感じたかもしれない。

なぜであらうか。問題はむしろ、そう思うという点にあるであらう。啓蒙主義以来、人間は、人間以上の存在を信じなくなつた。蒙を啓かれた人間にとって、この宇宙で最高・最大なものは人間になつてしまつたのである。そこには、その前に跪いて心底から何かを問いかける対象はなくなつてしまつた。人間が最高の存在なら、人間が対応すべき対象は人間だけである。となれば、それによつて生ずる人間と人間との関係は応対だけになる。そしてそれが自己中心の応対であれば、自己がある状態に維持するために必要な応対となり、それは虚偽の応対の中に各人を完全な孤独に追いやつてしまう。そしてそこにあるものは、瀕死の状態に於てさえ「真実の叫び」をあげることができないという、「もつとも恐しい」状態にすぎない。それはそうなつて当然であらう。だが一方では、人はそれから脱却しようとする。そのためさまざま